

資料編

資料編

第1節 調査結果

1 連携・協働の取組状況

(1) 連携・協働事業の状況

平成28、29年度で、市町村主管課が学校と連携・協働して取り組む事業の有無についての回答は、以下及び右図のようになった。

連携・協働事業の有無	市町村数
あり	12
なし	13

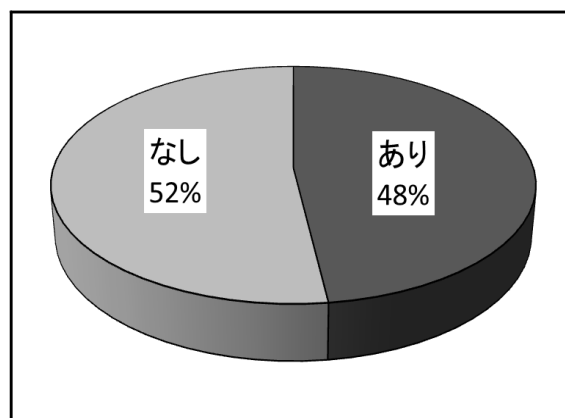


図17 市町村主管課が学校と連携・協働して取り組む事業の有無

具体的には、以下のような回答を得た。

市町村名	事業名
秋田市	☐ インターンシップ（職場体験）の受入 ☐ 科学部によるワークショップへの参加 ☐ ボランティア活動 ☐ 読み聞かせワークショップ
能代市	☐ 高校POP作成講座 ☐ 高校図書館講座 ☐ 学校教員10年研修受入 ☐ 商店街ビブリオバトル ☐ 第56回能代俳句大会 ☐ 能代市立図書館インターンシップ受入 ☐ 生涯学習・スポーツ振興課インターンシップ受入 ☐ みんなでAction!／命の大切さ事業・異年齢交流事業 ☐ 第57回能代俳句大会 ☐ ビブリオバトル能代高校生大会 ☐ おすすめPOP&ディスプレイ用POP作成講座 ☐ 能代市中央公民館高校生ボランティア育成講座
大館市	☐ 高齢者向けはちくんだンスの創作と指導者の育成 ☐ インターンシップ ☐ 被災地交流事業への参加
湯沢市	☐ 子どもゆざわ講座
鹿角市	☐ 高校生の社会参加活動への支援 （ボランティアの募集、参加の取りまとめ、主催者及び各校との連絡調整）
大仙市	☐ 大曲少年少女リーダー養成「ふれあい自然塾」 in キャンプ ☐ 大仙市民俳句大会

北秋田市	○生涯学習フェスタでの体験ブース ○家庭クラブとのプロジェクト事業 ○インターンシップ（職場体験） ○職場見学「コムコム見学」 ○あきたわくわく未来ゼミ～北秋田市会場～ ○冬の笑楽校２０１８ ○高校生×大学生交流会（高校生あきたわくわく未来ゼミ特別講座） ○KITAAKITA FES ２０１７ （主催：KITAAKITA FES実行委員会 協力：市教委） ○コムコム展示会（アトリエ・コムコム）
にかほ市	○にかほ探検隊事業
仙北市	○公民大学（陶芸学科・書道学科・園芸学科・樺染めサークル）
小坂町	○夏休み子ども教室（ものづくり体験教室） ○交流学习 ○町の伝統行事への参加 ○町民とのパークゴルフ交流
八郎潟町	○４歳児健康診断
東成瀬村	○小中学校物づくり教室（わくわくロボット教室）

これに対して学校が市町村と連携・協働して取り組む事業の有無については、以下及び右図のようになった。

連携・協働事業の有無	学校数
あり	72
なし	3

※回答数75校（全日制課程分校、定時制課程をそれぞれカウント）

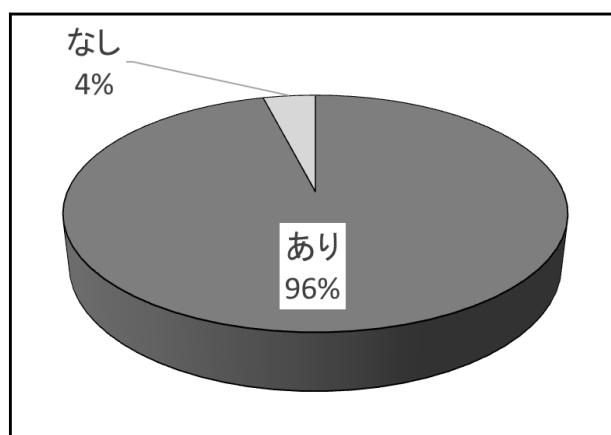


図18 学校が市町村主管課と連携・協働して取り組む事業の有無

連携・協働の対象を市町村主管課に限定せずに回答を求めた。その結果、ほとんどの学校で事例があり、対象も多様となっている。

（２）連携・協働の対象

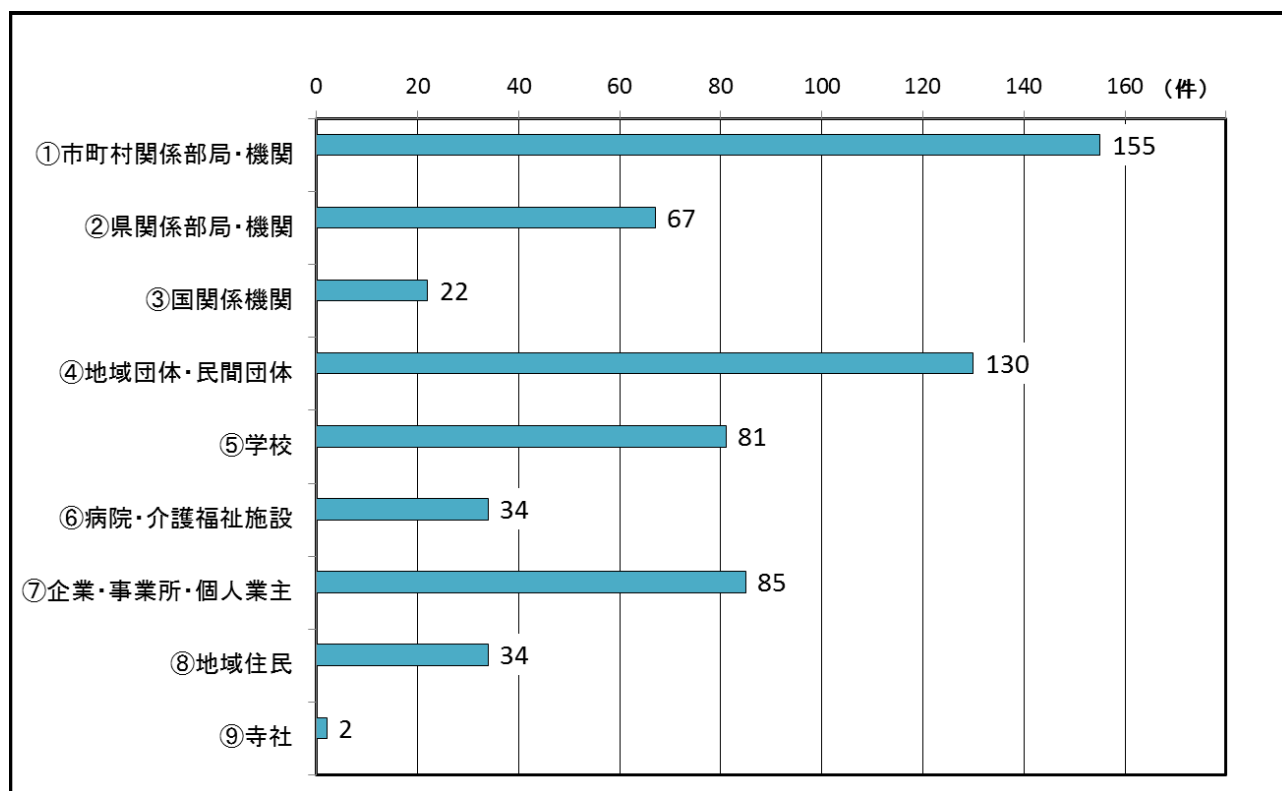


図 19 連携・協働の対象別取組件数（学校調査）

学校の連携・協働の対象別取組件数では、「①市町村関係部局・機関」との事例が最も多くなっている。「①市町村関係部局・機関」「②県関係部局・機関」「③国関係機関」を合わせると全体の４割となる。

次いで多いのが、「④地域団体・民間団体」で、この中には、社会福祉協議会や商工会等の民間の組織・団体、地域活動を行うＮＰＯ、芸能保存団体、各種文化・スポーツ団体、自治会等が含まれている。

「⑤学校」には、高等学校、特別支援学校、小・中学校、幼稚園、保育園が含まれている。

(3) 連携・協働の取組事例数

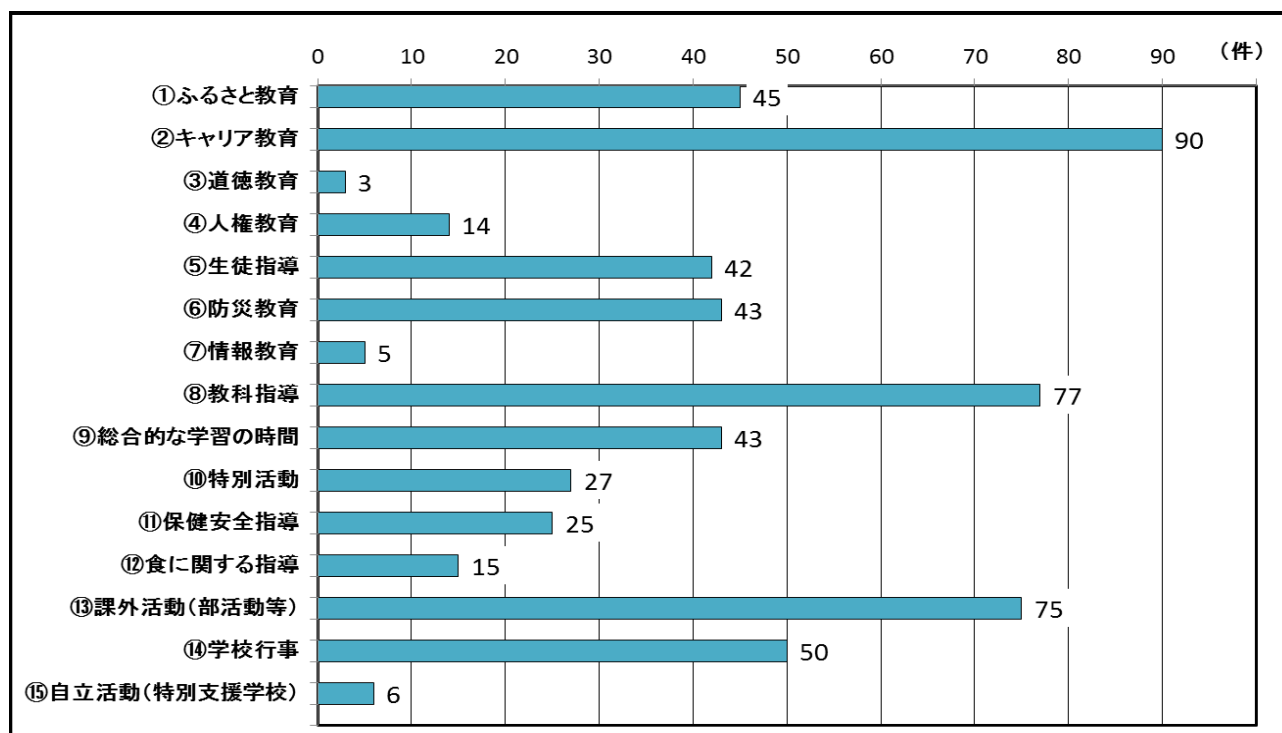


図 2 0 連携・協働の取組事例数（学校調査）

学校における連携・協働の取組事例数では、「②キャリア教育」「⑧教科指導」「⑬課外活動（部活動等）」が相対的に多く顕著である。

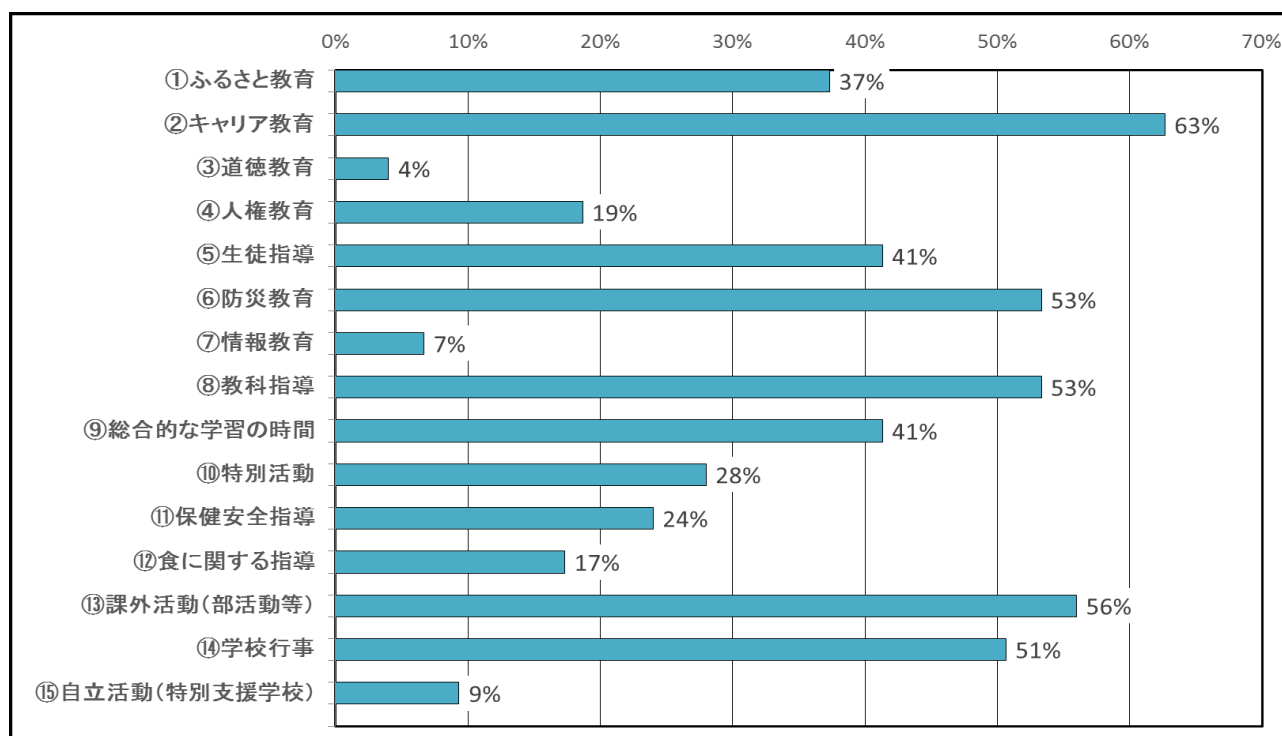


図 2 1 市町村や地域と連携・協働して進めている取組や活動の実施率（学校調査）

一校で複数の事例を回答している場合もあるため、実施率で比較した。「②キャリア教育」「⑥防災教育」「⑧教科指導」「⑬課外活動（部活動等）」「⑭学校行事」では実施率が5割を超え、相対的に実施率が高い。

(4) 連携・協働の取組状況

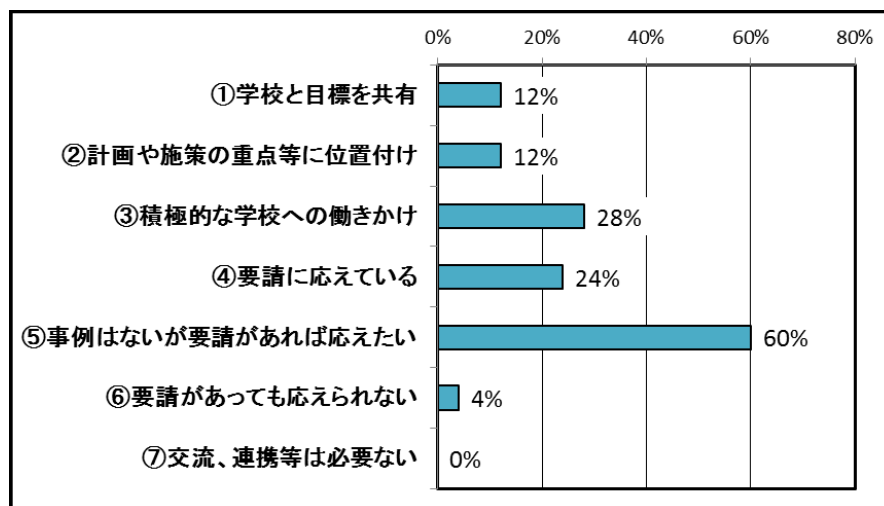


図 2 2 連携・協働の取組状況（市町村調査）

市町村調査では、連携・協働に積極的な姿勢と言える「①学校と目標を共有」「②社会教育計画や施策の重点等に位置付け」「③積極的な学校への働きかけ」の項目は3割未満で、実例のある「④要請に応じている」でも、全体の4分の1の割合であった。具体的実践例は少ない結果となった。

「⑤事例はないが要請があれば応えたい」が6割で相対的に高く、「⑥要請があっても応えられない」は微少、「⑦交流、連携等は必要ない」は回答が無かった。主管課では連携・協働について学校からの要請に応じる意向はあるが、積極的な働きかけや具体的な取組までには至っていない市町村が多いことがうかがわれる。

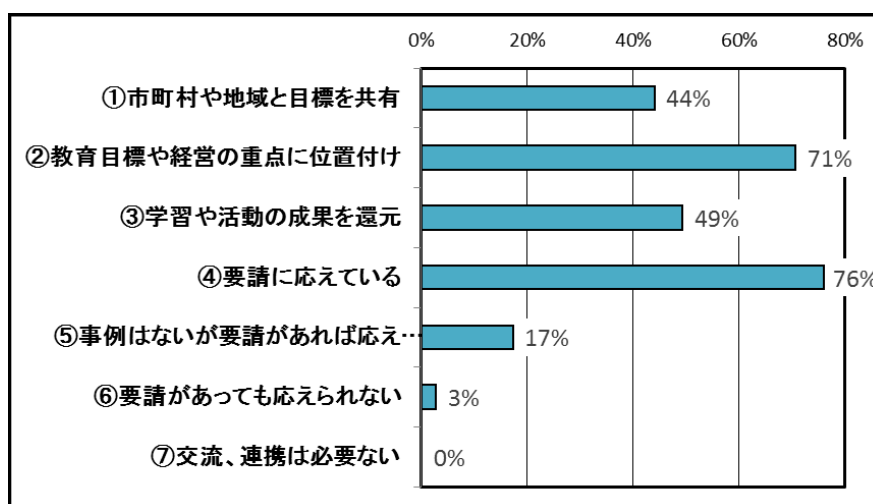


図 2 3 連携・協働の取組状況（学校調査）

これに対して学校調査では、「②教育目標や経営の重点に位置付け」で7割、「③学習や活動の成果を還元」「①市町村や地域と目標を共有」で4割超となり、市町村調査と比較すると連携・協働には積極的な姿勢をもつ学校が多いことがうかがわれる。また、「④要請に応じている」が7割超と多く、地域から何らかの要請による実例をもつ学校は多いと言える。

（５）他地域との連携・協働の意向

管内に、学校（高校や特別支援学校）がない市町村もあることから、各学校に対して所在地以外の市町村との連携・協働の可否について回答を求めた結果、以下の表及び図のようになった。「可能」「条件によって可能」を合わせると、ほぼ８割の学校で可能と答えている。

他地域との連携・協働の可否	学校数
可能	9
条件によって可能	48
難しい	16

※回答数 73校

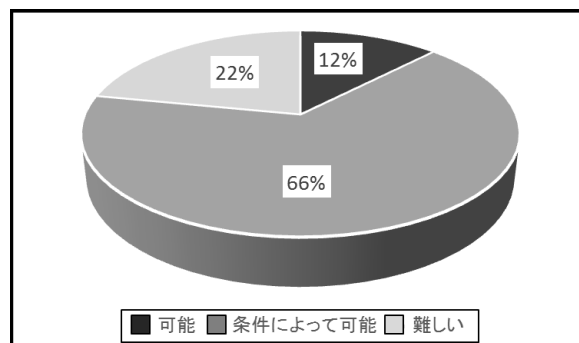


図 2 4 所在地以外での連携・協働の可否（学校調査）

（６）他地域との連携・協働における配慮事項

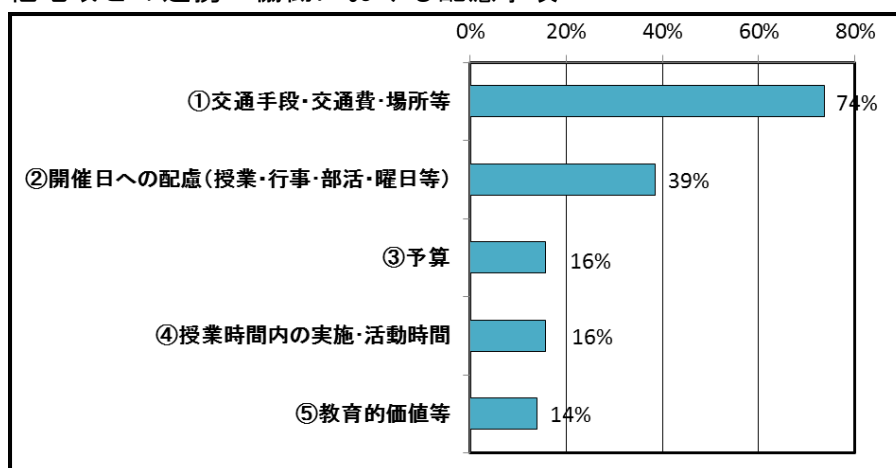


図 2 5 連携・協働事業での配慮事項（学校調査）

対象は、学校所在地以外の市町村との連携・協働が「可能」「条件によって可能」とした学校とする。

「①交通手段・交通費・場所等」に関する回答が7割を超え、相対的に顕著である。生徒の交通手段の確保と交通費の支給・捻出を主催側に求める回答が多くあり、検討・配慮すべき大きな課題と言える。「③予算」も約2割の回答があり、活動に対する予算的な裏付けを求める回答が見られる。

次いで、「②開催日への配慮（授業・行事・部活・曜日等）」があげられる。具体的には、「授業や行事で応じられないことがある」「土日（逆に平日もあり）は難しい」「部活動の大会に配慮してほしい」「早めに打合せをし年度当初の計画に入りたい」などの回答が見られた。

「④授業時間内の実施・活動」では、「生徒の実情に合わせた無理のない活動時間の設定」「終了時刻の厳守」等があげられた。「⑤教育的価値等」では、「事業と教育目標とのすり合わせ」「事業連携が本校である必要があるかの検討」「人材提供の企画には疑問」などが見られ、事業の教育的価値や効果などに対しての必要性や危惧に触れた回答があった。

2 連携・協働に対する意向

(1) 学習や指導における連携・協働の必要性

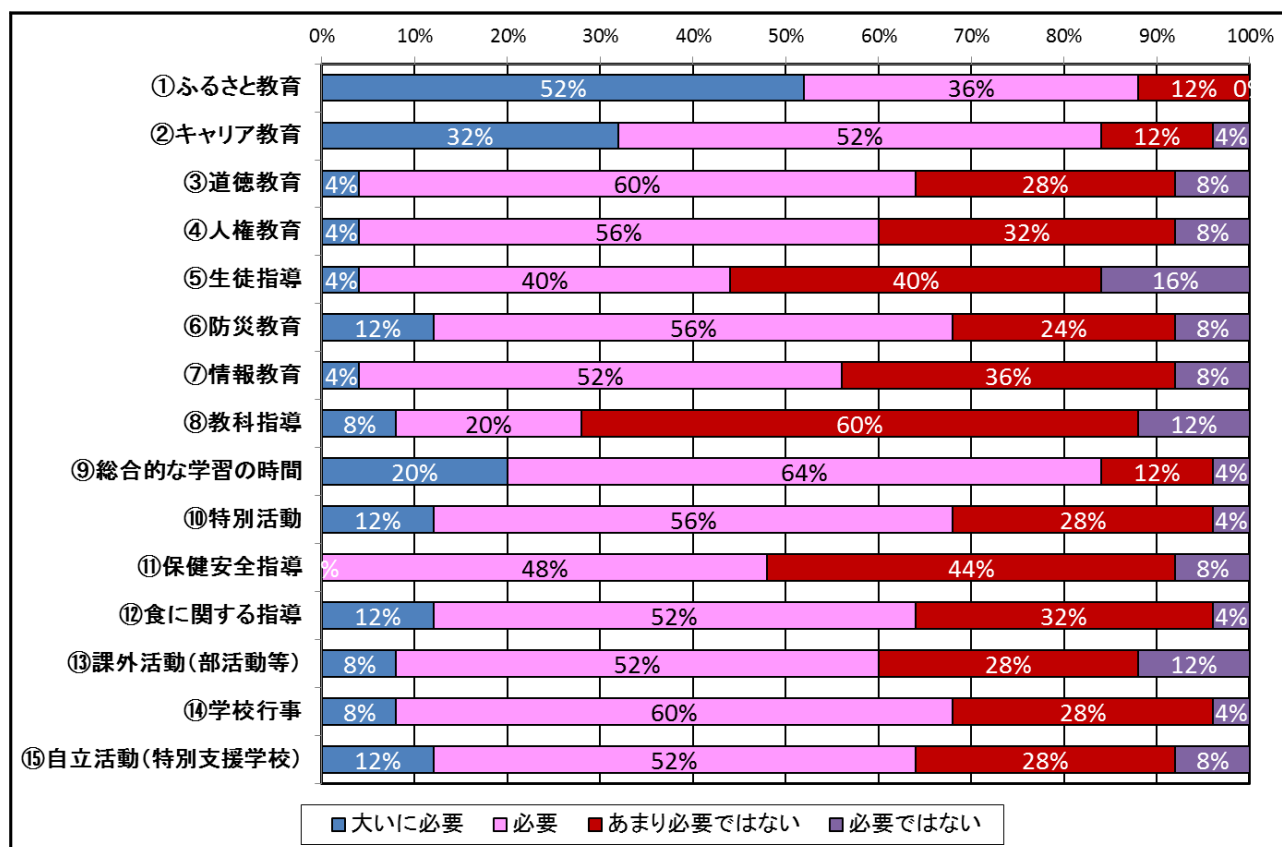


図 2 6 学習や指導における連携・協働の必要性（市町村調査）

連携・協働の必要性について、学校の教育活動に沿った学習や指導（「平成 2 9 年度学校教育の指針」参考）を選択肢とした。

必要性の程度について「大いに必要」「必要」を合わせた割合を見ると、市町村調査では、「①ふるさと教育」「②キャリア教育」「⑨総合的な学習の時間」が相対的に高く 8 割を超えている。特に「①ふるさと教育」において「大いに必要」と答えた割合は 5 割を超え、必要性の高さが顕著である。

次いで「③道徳教育」「④人権教育」「⑥防災教育」「⑩特別活動」「⑫食に関する指導」「⑬課外活動（部活動等）」「⑭学校行事」「⑮自立活動（特別支援学校）」で 6 割以上となっている。

「⑤生徒指導」「⑧教科指導」「⑪保健安全指導」では、5 割未満となっており、必要性の程度は相対的に低かった。

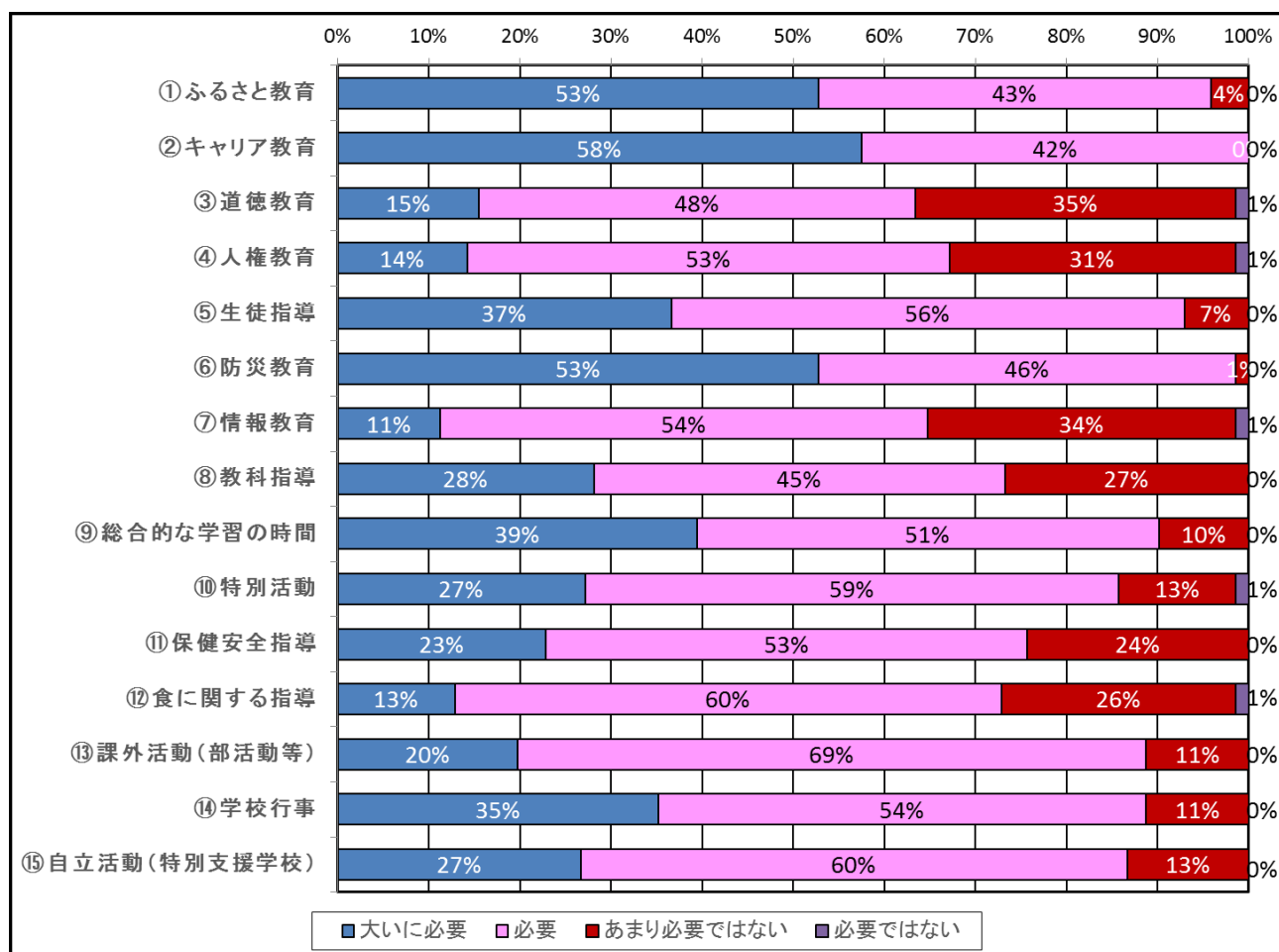


図 2 7 学習や指導における連携・協働の必要性（学校調査）

学校調査では、「大いに必要」「必要」を合わせた割合が全ての項目で6割を超えている。特に「①ふるさと教育」「②キャリア教育」「⑥防災教育」ではほぼ10割である。次いで「⑤生徒指導」「⑨総合的な学習の時間」「⑬課外活動（部活動等）」「⑭学校行事」は9割前後となっており、多くの学校で連携・協働の必要性の程度が高い。

「⑤生徒指導」「⑧教科指導」「⑪保健安全指導」では、7割を超えており、市町村調査とは異なる傾向が見られる。

(2) 連携・協働で進めたいテーマ

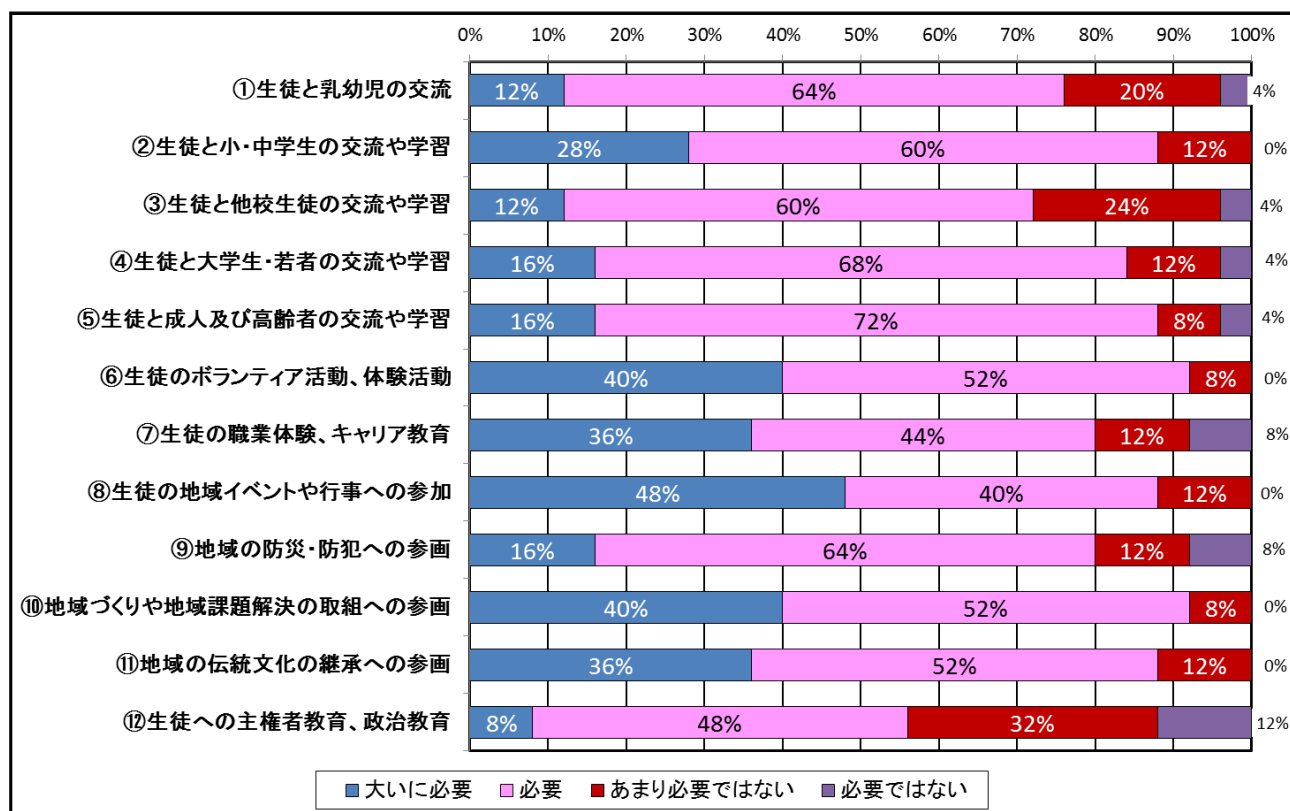


図28 学校と連携・協働で進めたいテーマ（市町村調査）

連携・協働で進めたいテーマとして、社会教育推進の視点での学習や交流を選択肢とした。

必要性について「大いに必要」「必要」を合わせた割合で見ると、市町村調査では、「⑥生徒のボランティア活動」「⑩地域づくりや地域課題解決の取組への参画」で9割以上、「②生徒と小・中学生の交流や学習」「④生徒と大学生・若者の交流や学習」「⑦生徒の職業体験、キャリア教育」「⑧生徒の地域イベントや行事への参加」「⑨生徒の防災・防犯への参画」で8割以上となった。

「⑫生徒への主権者教育、政治教育」は、6割未満となった。

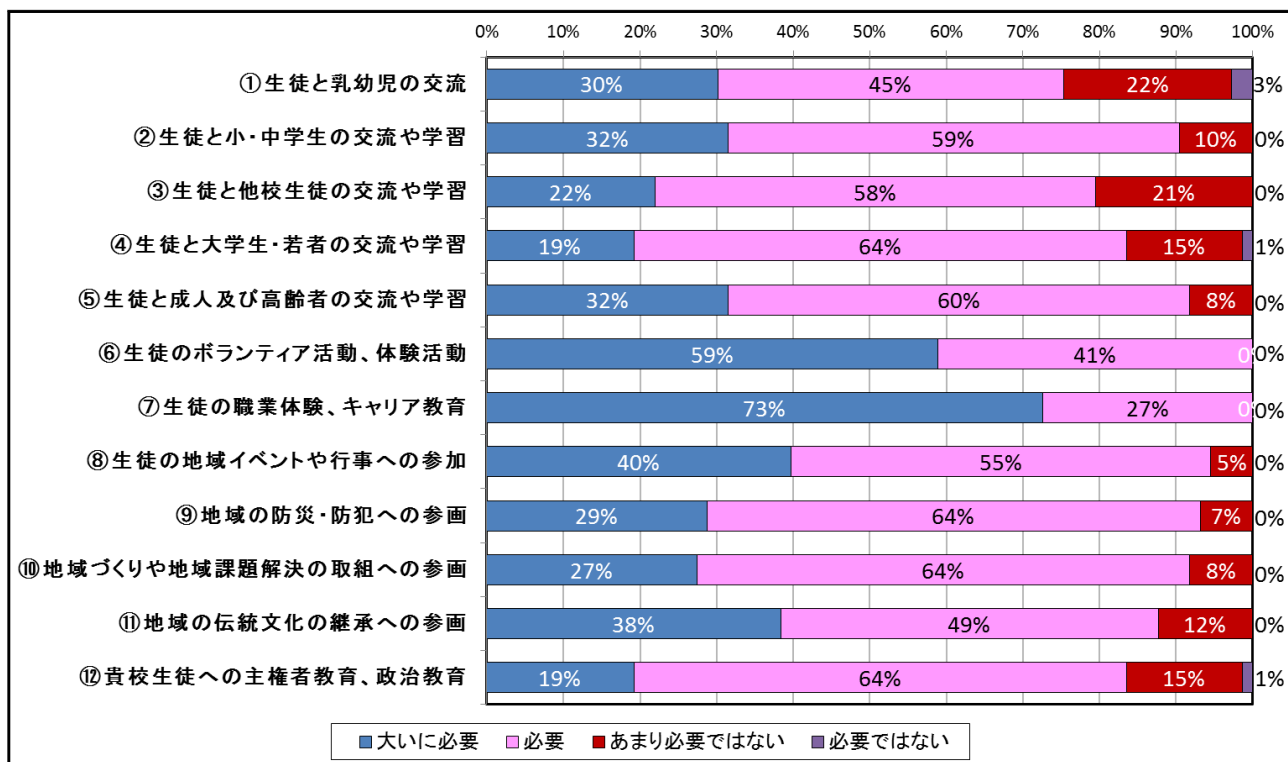


図 2 9 学校と連携・協働で進めたいテーマ（学校調査）

学校調査では、必要性について「大いに必要」「必要」を合わせた割合で見ると、全ての項目で7割以上となり、全体的に市町村調査の結果より高い結果となった。中でも、「⑥生徒のボランティア活動、体験活動」「⑦生徒の職業体験、キャリア教育」は10割と必要感の高さが顕著である。市町村調査で相対的に高かった6項目は、学校調査でも8割以上となっており似た傾向を示している。

「⑫生徒への主権教育、政治教育」は、8割以上となり、市町村調査とは異なる傾向が見られた。

（３）教師や生徒の派遣に対する期待

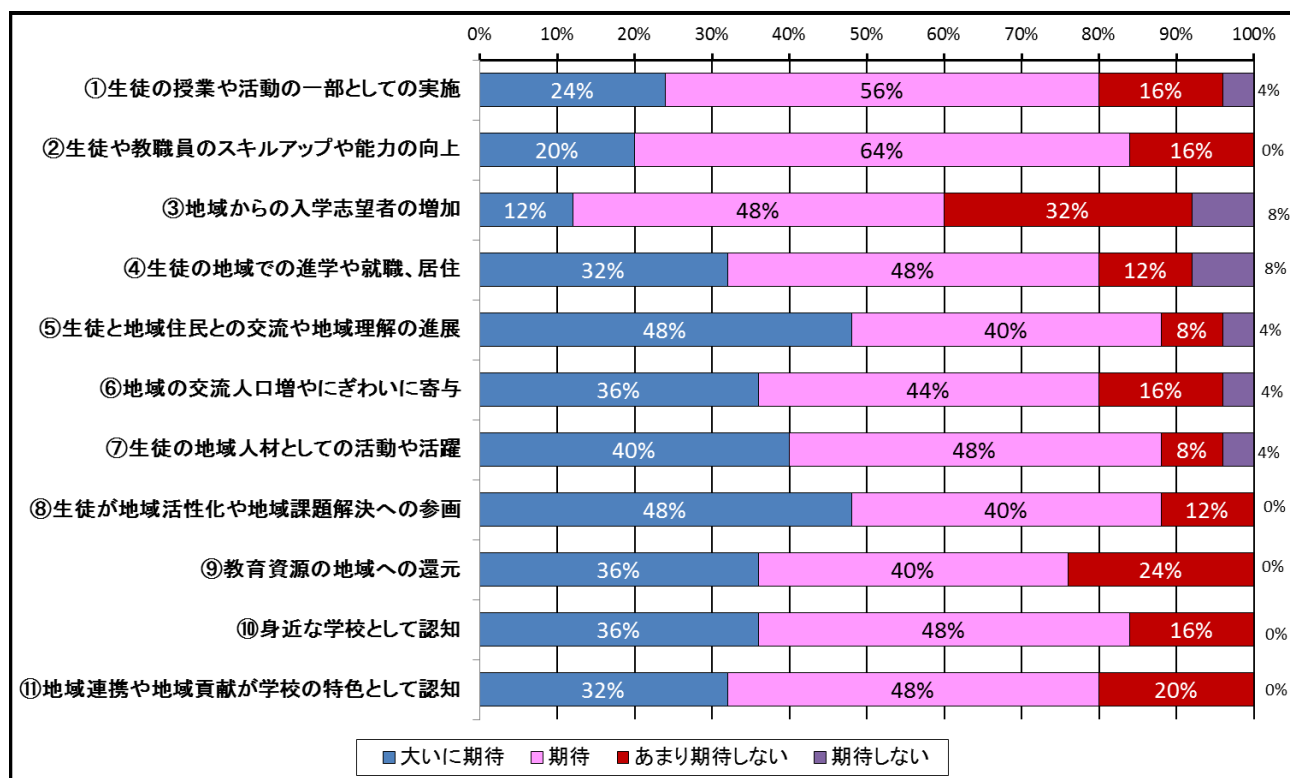


図３０ 教師や生徒の派遣に対する期待（市町村調査）

教師や生徒を派遣してもらうときの効果への期待感について「大いに期待」「期待」を合わせた割合で見ると、市町村調査では、９項目で８割以上となっている。この中でも「⑤生徒と地域住民との交流や地域理解の進展」「⑦生徒の地域人材としての活動や活躍」「⑧生徒の地域活性化や地域課題解決への参画」が相対的にやや高く、「大いに期待」の割合も他の項目より高いことから、主管課では、教師や生徒が地域と関わることや地域に寄与することについて期待している傾向がうかがわれる。

「③地域からの入学志望者の増加」は６割で、相対的には低い結果となった。

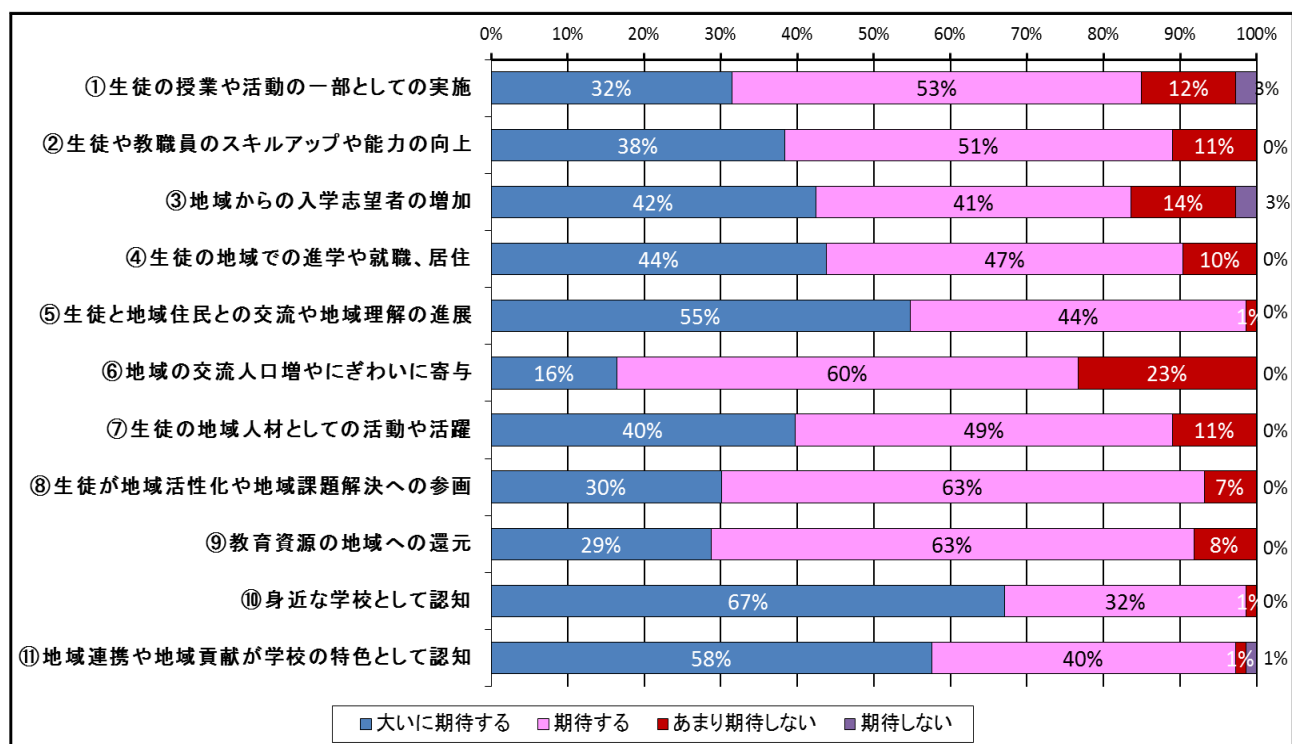


図 3 1 教師や生徒の派遣に対する期待（学校調査）

学校調査では、「大いに期待」「期待」を合わせた割合で見ると、10項目で8割以上となっている。この中で、特に「⑤生徒と地域住民との交流や地域理解の進展」「⑩身近な学校として認知」「⑪地域連携や地域貢献が学校の特色として認知」がほぼ10割で「大いに期待」の割合の高さが顕著である。

「③地域からの入学志望者の増加」でも8割以上あり、市町村調査の結果とは異なる傾向を示している。

第2節 調査票

平成29年度秋田県生涯学習センター調査研究事業
連携・協働による地域活性化事例に関する調査研究

生涯学習・社会教育主管課用アンケート調査

【ご協力をお願い】

秋田県生涯学習センターでは、今後の社会教育行政の充実を図るため、高等学校や特別支援学校と行政が連携・協働して行っている事業や取組の状況についてアンケート調査を行うことにしました。

調査結果は、標記研究の基礎資料とするとともに、県教育委員会が提供する情報や研修講座等の充実に資することを目的としています。

ついては、本調査の趣旨をご理解いただき、是非ともご協力くださいますようお願い申し上げます。

【記入にあたって】

(1) 対象

市町村の生涯学習・社会教育主管課

(2) アンケート調査票の記入、提出

① アンケート調査に担当者が回答を記入してください。

② 電子データで回答したい場合は、以下のサイトからダウンロードしてください。

秋田県生涯学習センターWebサイト→主催事業→調査研究→平成29年度調査研究事業
→ダウンロード「生涯学習・社会教育主管課アンケート調査票」からダウンロード

③ 回答済みの調査票をFAXか電子メールで送信してください。

送信先：秋田県生涯学習センター

FAX： 018-824-1799 (Iは小文字のエル)

E-mailアドレス：sgcen002@mail2.pref.akita.jp

※当センターへの回答締め切り：8月10日（木）

【問合せ先】県生涯学習センター 事業班（高橋・糸田）Tel018-865-1171

【調査項目】

1 基本情報

市町村名		
担当課		
記入者職・氏名		

2 高等学校や特別支援学校と市町村の連携・協働について

- (1) 貴課が平成28年度、29年度（予定も含む）で、高等学校や特別支援学校と連携・協働して進めている事業（※）はありますか。当てはまるものに○を付けてください。

※学校と取り組んでいる事業から学年や授業、課外活動等に取り組んでいる事業まで、広く捉えてください。

① ある	
② 無し	

- (2) (1)で、あると答えた場合は、連携・協働の対象、事業名を記入してください。
（欄が足りない場合は、行を増やしてご記入ください）

連携・協働の対象	取組・活動名
(例) ○○高校	ものづくり体験教室・交流授業

- (3) 貴課の、高等学校や特別支援学校との連携・協働に対する意向や取組状況について、近いものを選び、回答欄に○を記入してください。（複数回答可）

連携・協働の取組状況	回答欄
①高等学校や特別支援学校と目標を共有した取組がある	
②社会教育計画や施策の重点等に位置付けている	
③積極的に高等学校や特別支援学校へ事業連携を働きかけている	
④高等学校や特別支援学校からの要請に応じている	
⑤高等学校や特別支援学校との交流、連携等はほとんどないが要請があれば応えたい	
⑥高等学校や特別支援学校からの要請があっても応えられない	
⑦高等学校や特別支援学校との交流、連携等は必要ない	

- (4) 貴課が行っている、高等学校や特別支援学校との連携・協働の取組において、成果と考えること、課題や困難と考えることをそれぞれお書きください。

成果と考えること

--

課題や困難と考えること

--

- (5) 貴課では、次の①～⑯の高等学校や特別支援学校の学習や指導において、連携・協働がどの程度必要だと考えますか。回答欄にア～エの当てはまるものを記入してください。
 なお、「⑧教科指導」でアまたはイを選択した場合は、教科名の横に○を付けてください。（複数選択可）

ア：大いに必要である イ：必要である ウ：あまり必要ではない エ：必要ではない

No.	内容	回答欄	
①	ふるさと教育		} 国語 地歴・公民 数学 理科 外国語 芸術 家庭 情報 保体 農業 商業 工業 水産 福祉 その他
②	キャリア教育		
③	道德教育		
④	人権教育		
⑤	生徒指導		
⑥	防災教育		
⑦	情報教育		
⑧	教科指導	→ ア・イの場合は教科名に○ (複数回答可)	
⑨	総合的な学習の時間		
⑩	特別活動		
⑪	保健安全指導		
⑫	食に関する指導		
⑬	課外活動（部活動等）		
⑭	学校行事		
⑮	自立活動（特別支援学校のみ）		（その他記述）
⑯	その他	→	

- (6) 貴課では、社会教育における次の①～⑬のテーマについて、高等学校や特別支援学校との連携・協働がどの程度必要だと考えますか。回答欄にア～エの当てはまるものを記入してください。

ア：大いに必要である イ：必要である ウ：あまり必要ではない エ：必要ではない

	テーマ	回答欄
①	生徒と乳幼児の交流	
②	生徒と小・中学生の交流や学習	
③	高校生同士の交流や学習	
④	生徒と大学生・若者の交流や学習	
⑤	生徒と成人及び高齢者の交流や学習	
⑥	生徒のボランティア活動、体験活動	
⑦	生徒の職業体験、キャリア教育	
⑧	生徒の地域イベントや行事への参加	
⑨	地域の防災・防犯への参画	
⑩	地域づくりや地域課題解決の取組への参画	
⑪	地域の伝統文化の継承への参画	
⑫	生徒への主権者教育、政治教育	
⑬	その他	

↓（その他記述）

--

- (7) 貴課が市町村の事業やボランティア活動等に高等学校や特別支援学校の生徒や教職員を派遣してもらうとき、次の①～⑫の項目についての効果をどの程度期待しますか。回答欄にア～エの当てはまるものを記入してください。

ア：大いに期待する イ：期待する ウ：あまり期待しない エ：期待しない

	市町村の事業やボランティア活動等	回答欄
①	生徒の授業や活動の一部として実施できること	
②	生徒や教職員のスキルアップや能力の向上につながる	
③	地域からの入学志望者が増えること	
④	生徒の地域での進学や就職、居住につながる	
⑤	生徒と地域住民との交流や地域理解が進むこと	
⑥	地域の交流人口が増え、にぎわいにつながる	
⑦	生徒が地域の事業や行事を支える人材として活動すること	
⑧	生徒が地域活性化や地域課題解決への取組に参画すること	
⑨	当該校の教育資源を地域に還元すること	
⑩	当該校が地域住民にとって身近な学校として認知されること	
⑪	地域連携や地域貢献が当該校の特色となること	
⑫	その他	

↓（その他記述）

--

ご協力ありがとうございました

学校用アンケート調査

【ご協力をお願い】

秋田県生涯学習センターでは、今後の社会教育行政の充実を図るため、高等学校や特別支援学校と行政が連携・協働して行っている事業や取組の状況についてアンケート調査を行うことにしました。

調査結果は、標記研究の基礎資料とするとともに、県教育委員会が提供する情報や研修講座等の充実に資することを目的としています。

については、本調査の趣旨をご理解いただき、是非ともご協力くださいますようお願い申し上げます。

【記入にあたって】

(1) 対象

秋田県内の高等学校 (全日制・分校・定時制それぞれご回答ください)
特別支援学校 (高等部)

(2) アンケート調査票の記入、提出

①別添の回答票（エクセルデータ）に担当者が回答を入力してください。

②以下のサイトからダウンロードすることもできます。

秋田県生涯学習センターWebサイト→主催事業→調査研究→平成29年度調査研究事業
→ダウンロード「学校用アンケート調査票」からダウンロード

③回答済みの調査票をFAXか電子メールで送信してください。

送信先：秋田県生涯学習センター

FAX：018-824-1799 ←（Iは小文字のエル）

E-mailアドレス：sgcen002@mail2.pref.akita.jp

※当センターへの回答締め切り：8月10日（木）

【問合せ先】県生涯学習センター 事業班（高橋・糸田）TEL018-865-1171

【調査項目】

1 基本情報

学校名		
記入者職・氏名		
校務分掌		

2 学校と市町村や地域との連携・協働について

- (1) 次の①から⑯の学習や指導について、貴校が平成28年度、29年度（予定も含む）において、県内の市町村（以下、市町村）や地域と連携・協働して進めている取組や活動（※）はありますか。該当する取組や活動がある場合は、連携・協働の対象、取組や活動名を記入してください。なお、「⑧教科指導」については、該当する教科名も記入してください。（プルダウンから選択もできます）

※学校全体で取り組んでいることから学年や授業、課外活動等に取り組んでいることまで、広く捉えてください。

	学習や指導	連携・協働の対象	取組・活動名	
例	教科指導	〇〇市教育委員会	ものづくり体験教室・交流授業	工業
①	ふるさと教育			↓教科名
②	キャリア教育			
③	道徳教育			
④	人権教育			
⑤	生徒指導			
⑥	防災教育			
⑦	情報教育			
⑧	教科指導			
⑨	総合的な学習の時間			
⑩	特別活動			
⑪	保健安全指導			
⑫	食に関する指導			
⑬	課外活動（部活動等）			
⑭	学校行事			
⑮	自立活動（特別支援学校のみ）			
⑯	その他			

1つの「学習や指導」に複数の取組や活動がある場合は、適宜行を追加して記入してください。

教科名（プルダウンから選択もできます）	
国語	保健体育
地歴・公民	農業
数学	商業
理科	工業
外国語	水産
芸術（音楽・美術・工芸・書道）	福祉
家庭	その他
情報	

- (2) 貴校の連携・協働に対する意向や取組状況について、近いものを選び、回答欄に○を記入してください。（複数回答可）

連携・協働の取組状況	回答欄
①市町村や地域と目標を共有した取組がある	
②市町村や地域との連携・協働を教育目標や経営の重点等に位置付けている	
③積極的に生徒の学習や活動の成果を市町村や地域に還元している	
④市町村や地域からの要請に応えている	
⑤市町村や地域との交流、連携等はほとんどないが要請があれば応えたい	
⑥市町村や地域からの要請があっても応えられない	
⑦市町村や地域との交流、連携等は必要ない	

- (3) 貴校が行っている、市町村や地域との連携・協働の取組において、成果と考えること、課題や困難と考えることをそれぞれお書きください。

成果と考えること

課題や困難と考えること

- (4) 貴校は、学校所在地以外の市町村との連携・協働は可能ですか。①～③から当てはまるものを選び、回答欄に○を付けてください。
 なお、①・②に○を付けた場合は、下の欄に配慮してもらいたいことを書いてください。

連携・協働の可否	回答欄
①可能である	
②条件によって可能である	
③難しい	

配慮してほしいこと（例：生徒の交通手段の確保、土日の開催は避けてほしい など）

- (5) 貴校の学習や指導において、次の①～⑯の内容では、市町村や地域との連携・協働がどの程度必要だと考えますか。回答欄にア～エの当てはまるものを記入してください。
 なお、「⑧教科指導」でアまたはイを選択した場合は、教科名の横に○を付けてください。（複数選択可）

ア：大いに必要である イ：必要である ウ：あまり必要ではない エ：必要ではない

内容	回答欄
① ふるさと教育	
② キャリア教育	
③ 道德教育	
④ 人権教育	
⑤ 生徒指導	
⑥ 防災教育	
⑦ 情報教育	
⑧ 教科指導	→ ア・イの場合は教科名に○ (複数回答可)
⑨ 総合的な学習の時間	
⑩ 特別活動	
⑪ 保健安全指導	
⑫ 食に関する指導	
⑬ 課外活動（部活動等）	
⑭ 学校行事	
⑮ 自立活動（特別支援学校のみ）	
⑯ その他	→ (その他記述)

国語	
地歴・公民	
数学	
理科	
外国語	
芸術	
家庭	
情報	
保体	
農業	
商業	
工業	
水産	
福祉	
その他	

- (6) 貴校では、次の①～⑬のテーマについて、市町村や地域との連携・協働がどの程度必要だと考えますか。回答欄にア～エの当てはまるものを記入してください。

ア：大いに必要である イ：必要である ウ：あまり必要ではない エ：必要ではない

テーマ	回答欄
① 貴校生徒と乳幼児の交流	
② 貴校生徒と小・中学生の交流や学習	
③ 貴校生徒と他校生徒の交流や学習	
④ 貴校生徒と大学生・若者の交流や学習	
⑤ 貴校生徒と成人及び高齢者の交流や学習	
⑥ 貴校生徒のボランティア活動、体験活動	
⑦ 貴校生徒の職業体験、キャリア教育	
⑧ 貴校生徒の地域イベントや行事への参加	
⑨ 地域の防災・防犯への参画	
⑩ 地域づくりや地域課題解決の取組への参画	
⑪ 地域の伝統文化の継承への参画	
⑫ 貴校生徒への主権者教育、政治教育	
⑬ その他	

↓ (その他記述)

- (7) 貴校が市町村の事業やボランティア活動等に貴校の生徒や教職員を派遣するとき、次の①～⑫の項目についての効果をどの程度期待しますか。回答欄にア～エの当てはまるものを記入してください。

ア：大いに期待する イ：期待する ウ：あまり期待しない エ：期待しない

	市町村の事業やボランティア活動等	回答欄
①	生徒の授業や活動の一部として実施できること	
②	生徒や教職員のスキルアップや能力の向上につながる	
③	地域からの入学志望者が増えること	
④	生徒の地域での進学や就職、居住につながる	
⑤	生徒と地域住民との交流や地域理解が進む	
⑥	地域の交流人口が増え、にぎわいにつながる	
⑦	生徒が地域の事業や行事を支える人材として活動	
⑧	生徒が地域活性化や地域課題解決への取組に参画	
⑨	貴校の教育資源を地域に還元すること	
⑩	貴校が地域住民にとって身近な学校として認知さ	
⑪	地域連携や地域貢献が貴校の特色となること	
⑫	その他	

↓（その他記述）

--

ご協力ありがとうございました

市町村職員専門研修② 実施レポート

日時：平成29年7月26日（水）10時30分～15時30分

会場：秋田県生涯学習センター 4階 第1研修室 参加者：23名（うち市町村職員3名）

市町村の生涯学習・社会教育主管課の職員を主な対象に、業務上の参考となる専門的な内容の研修を実施しました。2回目となる今回は、「高校生の地域参画～高校と社会教育の接点を探る～」をテーマに、高校の教職員にも参加していただき、高校生が地域活動に参画する意義や、社会教育としての関わり方について学びました。

【午前の部】

午前の講義では、一般社団法人全国高等学校PTA連合会の**佐野元彦顧問**から、「社会総がかりの人財育成」の演題でお話をいただきました。

激しく変化する社会状況、とりわけ人口減少や少子高齢化が著しい本県にあっては、少数精鋭の国づくりが必須であること、そしてAI（人工知能）が急速に発達する中、習得した知識・技能を活用して「課題を発見する力」をいかに身に付けさせるかが教育のポイントであると述べられました。

また、将来の人財には、数値では測れない「非認知能力」の育成が重要であり、それは家庭や地域で多彩な体験を積み重ねることを通じて得られることや、高い志、自己肯定感を高めるためには、人の役に立ち感謝される機会が必要と強調されました。その機会が多いのは家庭だが、より多くの人に認められるのは地域での活動であり、ここに社会教育の役割があると指摘されました。

さらに、社会参画の意識を高めるためには、地域の良さだけではなく、地域の課題を学び、その解決のために考え行動する機会が必要であり、そのために社会総がかりで人財を育てるという意識が求められることを述べられました。最後に、生涯学習への期待として、個人で自己完結するのではなく、学んだこと（インプット）を活用し、周囲に影響を与えること（アウトプット）が大切であること、その拠点として地域に学校が残っていることの意義、行政施策の中に「学習の視点」が必要であることを強調されました。

人財育成の意義、その中での社会教育の役割を明確に示していただき、示唆に富んだ講義となりました。



＜社会教育関係者にとって励みになるお話でした＞

【午後の部】

午後の部は、県立矢島高等学校の**石澤宏基教諭**と、能代市中央公民館事業係の**見上翔太氏**から、それぞれ高校・社会教育の視点からの事例紹介をいただきました。

石澤教諭からは、多様なボランティア活動を通じて、学校と地域が相互に支え合い、優れた教育効果を得るとともに、地域の活性化に寄与している矢島高校の取組事例を御紹介いただきました。

見上氏からは、公民館が高校生と地域を仲立ちし、生徒の地域参画を推進している「高校生ボランティア育成事業」の取組事例を、狙いや課題も交えて詳しく御紹介いただきました。



＜様々な意見が交わされました＞

両者とも、高校生が地域活動に参画することで、自己有用感の醸成や実社会を学ぶといった教育効果が得られるとともに、若者らしいアイデアの提供などを通じて、地域にも相乗効果があることを強調されていました。

研修の最後には、参加者同士での意見交換を行いました。「高校と社会教育の接点を探る」というテーマのもと、お互いに対するイメージや、それに対する実態の紹介、高校や社会教育の連携により期待される効果などの話題で盛り上がりしました。

高校生の地域参画・ボランティア活動の意義や有用性を再認識するとともに、「生徒は無報酬の労働力ではないので、活動の際には教育的な目的や生徒の成長といった視点が欠かせない」という意見が印象に残りました。

【参加者の声】（抜粋）

- ・ 佐野先生の講義はとても整理された分かりやすいお話で、最初から終わりまで引き込まれました。
- ・ 地域の中に学校が残っていることの意義を改めて認識しました。
- ・ 学校と地域の接点として、公民館ができることを考えたいです。
- ・ 教員と自治体の方が同じテーマや課題で話し合うことが少ないので、このような機会を増やしてもらいたい。

秋田県生涯学習・社会教育研究大会(兼)行動人交流集会 実施レポート

日時：平成29年12月7日(木) 10時～15時30分

会場：秋田県生涯学習センター 3階講堂 参加者：県内24市町村及び県外から219名

今年度最後の研修事業となる「生涯学習・社会教育研究大会」を、「行動人(こうどうびと)交流集会」との合同で開催しました。「人づくり・地域づくりを推進する生涯学習・社会教育の体制充実を目指して」のテーマで、県内外から参加した200名以上の方が熱心に学び、交流しました。

【午前の部】

はじめに、全国社会教育委員連合の**坂本登副会長**から「人づくり・地域づくりと社会教育～その推進体制の充実に向けて～」と題して、基調講演をしていただきました。

ご自身と秋田県のつながりから話を始められ、他県の例や東日本大震災の教訓も交えながら、社会教育の有用性について話題を展開されました。



<坂本登副会長>



<200名を超える参加者>

「地域」や「地域づくり」について

説明される中で、地域づくりはそこに住んでいる人たちの「つながり」が広がっていくことであり、血縁・地縁・知縁という3つの「ちえん」を生かした「社会教育スタート」が大切であることや、そこからネットワークが出来ていく仕組みについて、詳しくお話ししていただきました。

最後に、社会教育の活性化のためには、しっかりとした計画の策定が大切であり、そのために社会教育委員をはじめとする関係者の役割が大きいことを強調されました。

基調講演のあとは、昼食をはさんで「交流タイム」を設けました。県内各地で活躍している「行動人」の皆さんによる活動展示は、今年も大盛況となり、展示を楽しみながらの積極的な交流が行われました。



<「行動人」の活動展示>

【午後の部】

午後の部は、はじめに県生涯学習センターの**糸田和樹社会教育主事**が「企業との連携事例～『あきぎん長活き学校』とのコラボレーション～」と題して研究報告を行い、秋田銀行と県生涯学習課・生涯学習センターが連携して行っている講座について報告しました。

続いて行われた事例研究では、坂本副会長がコーディネーターとなり、大館市で活動する子育て支援サークル「アミュージングサポート『あ☆そ☆ぶ』」の**河田美智子事務局長**、潟上市天王公民館の**鈴木健二館長**、県立横手高校定時制の**細井才智教諭**から事例発表をしていただきました。

河田事務局長からは、元行政職員としての人脈やノウハウを生かして、組織づくりや地域での活動を行ってきた経緯について紹介がありました。鈴木館長からは「寺子屋てんのう」事業について、大学生ボランティアと一緒に事業を進めてきた経緯や公民館の役割、学生たちからの熱いビデオメッセージの紹介がありました。細井教諭からは学校と地域が一緒に行う避難所開設・運営訓練について、具体的な活動の様子や訓練を通じた生徒たちの成長、地域との連携の深まりについて紹介していただきました。

会場からも多くの質問や意見をいただき、最後に坂本副会長から、①3事例とも子どもや若者に焦点を当てており、将来に向けて変わっていくべき点を示していること、②子どもや若者の育成を通じて、個人と社会の関わりについて考えていく必要があること、③学校と地域の連携という点で、地域がどう学校を応援、支援していけるかが大切であること、という3つの視点で会をまとめていただきました。

外は寒い日でしたが、会場内は参加者の熱意があふれ、充実した内容の一日となりました。



<事例研究での発表>

【参加者の声】(抜粋)

- ・今回ほど人づくりや地域づくりについて、整理して教えていただけたことはありません。
- ・地域づくりにおける社会教育の重要性を、改めて感じました。
- ・社会教育行政に関わる者として、様々な具体例を示していただき、大いに参考になりました。
- ・毎年この会で行動人の皆さんと触れ合うことが、何よりの楽しみになっています。